

『偽薬』

学生のMはお金に困っていた。学費や生活費がかさみ、アルバイトを掛け持ちしても月末には財布が軽くなる。そんなとき、大学の掲示板の「実験アルバイト募集」の張り紙が目に入った。

内容は「人体に無害な薬を服用して研究施設内で数日間、自由に過ごすだけ」というもの。それでいて報酬は破格の金額だった。

「健康な二十代男性」という条件も満たしていたMは早速応募し、無事に採用された。指定された日時に研究施設を訪れると病室のような部屋に通され、この実験を担当する研究員だという白衣の男性から青いカプセルと赤い水が入った紙コップを渡された。研究員は淡々と説明を始める。

「実はこのカプセルには何も入っていません。水も食紅で色をつけただけのミネラルウォーターです。証明書もありますので、ご安心ください。これを飲んでもらうだけで結構です。」プラセボ効果というのはMも聞いたことがある。実際は何の効果も持たない偽の薬を「良い薬」などと患者に伝えてから服用すると症状の改善が見られる不思議な現象だ。だが、この研究員の言うことが本当なら、これから行うのはそれとは真逆の、まるで手品の種を明かしてから実演してみせるようなことだ。

一体これは何の実験なのだろう？

Mは疑問と不安を感じながらも報酬のことを思い、言われたとおり青のカプセルを口に含み、赤い水でそれを流し込んだ。

施設内での生活に特に不便なことはなかった。起床時間と就寝時間を除いてあとは読書やゲームなどをして自由に過ごし、食事もデリバリーで好きなものを頼むことができた。むしろ普段より贅沢な暮らしと言えた。

唯一の気掛かりと言え、研究員がたびたびMの元にやってきて「繰り返しになりますが、薬には何の効果もありませんのでご心配なく。」としつこく伝えてくることぐらいだった。

数日が経ち、契約どおりの報酬を受け取ったMは何事もなく施設を後にした。

再び戻ったいつもの日常。ところが間もなくしてMの身に様々な出来事が起こった。普段は厳しい教授から珍しく論文を褒められたり、少額だが宝くじに当選したり、友人たちが妙に親しげに接してくるようになった。

また同時に不運も重なった。突然熱を出して寝込んだり、何もないところで躓いて足首を捻ったり、街を歩いていてもどうも周囲の人々の視線が自分に集まるように感じ、落ち着かなかった。

「もしかして、あの薬の影響なのか？」

それからというもの、Mはすべての出来事が薬によるものではないかと疑うようになってしまった。良いことが起こると薬のおかげだと感じ、悪いことが起きれば薬のせいだと思い込

んだ。そのうち日々の現実感が薄れ、彼の心はどんどん不安定になっていった。

「薬にはなんの効果ありませんのでご心配なく。」

あの言葉が頭の中で反響する。

ついに耐えきれなくなったMは再び施設を訪れ研究員に問い詰めた。

「本当にあの薬と水には何も入っていなかったのですか？」

研究員は冷静に答えた。

「ええ、何度もお伝えした通りです。証明書をご覧になりますか？」

だが今さら何を見聞きしたところで疑念が晴れることはない。Mは肩を落として帰路についた。外は太陽がまぶしく照りつけていたが、その光さえもどこか偽物のように感じられた。Mの背中を見送ると研究員は今回の実験の結果を紙に書き込んだ。

「やはり彼も他の被験者と同様だ。こちらが何もないと言えは言うほど逆に何かあると疑い出し、一度そうなれば単なる偶然の出来事にも勝手に因果を結びつけ思い悩むようになってしまう。疑惑という偽薬の効果は実に絶大だ。」